

コ－ヒ－哲学序説

寺田寅彦

青空文庫

八九歳のころ医者^{いしや}の命令^{めいれい}で始めて牛乳というものを飲まされた。当時まだ牛乳は少なくとも大衆一般の嗜好品^{しこうひん}でもなく、常用栄養品でもなく、主として病弱な人間の薬用品であつたように見える。そうして、牛乳やいわゆるソップがどうにも臭くつて飲めず、飲めばきつと嘔吐^{おうと}したり下痢^{げり}したりするという古風な趣味の人の多かつたころであつた。もつともそのころでもモダンなハイカラな人もたくさんあつて、たとえば当時通学していた番町^{ばんちやう}小学校の同級生の中には昼の弁当としてパンとバタを常用していた小公子もあつた。そのバタというものの名前さえも知らず、きれいな切り子ガラスの小さな壺^{つぼ}にはいった妙な黄色い蠟^{ろう}のようなものを、象牙^{ぞうげ}の耳かきのようなものでしゃくい出してパンになすりつけて食っているのを、隣席からさもしい好奇の目を見張っていたくらいである。その一方ではまた、自分の田舎^{いなか}では人間の食うものと思われていない蝗^{いなご}の佃煮^{つくだに}をうまそうに食っている江戸っ子の児童もあつて、これにもまたちがつた意味での驚異の目を見張つたのであつた。

始めて飲んだ牛乳はやはり飲みにくい「おくすり」であつたらしい。それを飲みやすくするために医者^{いしや}はこれに少量のコーヒを配剤^{はいざい}することを忘れなかつた。粉にしたコーヒ

ーをさらし木綿もめんの小袋にほんのひとつまみちよつぱり入れたのを熱い牛乳の中に浸して、漢方の風邪薬かぜくすりのように振り出し絞り出すのである。とにかくこの生まれて始めて味わったコーヒーの香味はすっかり田舎育ちいなかの少年の私を心酔させてしまった。すべてのエキゾテックなものに憧憬どうけいをもつていた子供心に、この南洋的西洋的な香氣は未知の極楽郷から遠洋を渡つて来た一脈の薫風くんふうのように感ぜられたものである。その後まもなく郷里の田舎へ移り住んでからも毎日一合の牛乳は欠かさず飲んでいたが、東京で味わつたようなコーヒーの香味はもう味わわれなかつたらしい。コーヒー糖と称して角砂糖の内うちにひとつまみの粉末を封入したものが一般に愛用された時代であつたが往々それはもう薬臭くかび臭い異様の物質に変質してしまつていた。

高等学校時代にも牛乳はふだん飲んでいたがコーヒーのようなぜいたく品は用いなかつた。そうして牛乳に入れるための砂糖の壺つぼから随時に歯みがきブラシの柄などでしゃくき出しては生の砂糖をなめて菓子かしの代用にしたものである。試験前などには別して砂糖の消費が多かつたようである。月日がめぐつて三十二歳の春ドイツに留学するまでの間におけるコーヒーと自分との交渉についてはほとんどこれという事項は記憶に残つていないようである。

ベルリンの下宿はノーレンドルフの辻つじに近いガイスベルク街にあって、年老いた主婦は陸軍将官の未亡人であった。ひどくいばったばあさんであったがコーヒーはよいコーヒーをのませてくれた。この二階で毎朝寝巻のまま窓前にそびゆるガスアンシユタルトの円塔をながめながら婢ひのヘルミーナの持つて来る熱いコーヒーを飲み香ばしいシユニツペルをかじった。一般にベルリンのコーヒーとパンは周知のごとくうまいものである。九時十時あるいは十一時から始まる大学の講義を聞きにウンテル・デン・リンデン近くまで電車で出かける。昼前の講義が終わって近所で食事をするのであるが、朝食が少量で昼飯がおそく、またドイツ人のように昼前の「おやつ」をしないわれらにはかなり空腹であるところへ相当多量な昼食をしたあとは必然の結果として重い眠けが襲来する。四時から再び始まる講義までの二三時間を下宿に帰ろうとすれば電車で空費する時間が大部分になるので、ほど近いいろいろの美術館をたんねんに見物したり、旧ベルリンの古めかしい街区のことさらに陋巷ろうこうを求めて彷徨ほうこうしたり、ティアガルテンの木立ちを縫うてみたり、またフリードリヒ街や、ライプチヒ街のショウウインドウをのぞき込んで「ベルリンのギンブラ」をするほかはなかった。それでもつぶしきれない時間をカフェーやコンデイトライの大理石のテーブルの前に過ごし、新聞でも見ながら「ミット」や「オーネ」のコーヒー

をちびちびなめながら淡い郷愁を 瞞まん着ちやくするのが常習になつてしまつた。

ベルリンの冬はそれほど寒いとは思わなかつたが暗くて物うくて、そうして不思議な重苦しい眠けが濃い霧のように全市を封じ込めているように思われた。それが無意識な軽微の慢性的郷愁と混合して一種特別な眠けとなつて額をおさえつけるのであつた。この眠けを追い払うためには実際この一杯のコーヒーが自分にはむしろはなはだ必要であつたのである。三時か四時ごろのカフェーにはまだ吸血鬼の粉ふんたい、黛たいの香もなく森閑としてどうかするとねずみが出るくらいであつた。コンデイトライには家庭的な婦人の客が大多数でほからかにぎやかなソプラノやアルトのさえずりが聞かれた。

国々を旅行する間にもこの習慣を持つて歩いた。スカンデナヴィアの田舎いなかには恐ろしくがんじようで分厚ぶんあつでたたきつけても割れそうもないコーヒー茶わんにしばしば出会つた。そうして茶わんの縁の厚みでコーヒーの味覚に差違を感じるという興味ある事実を体験した。ロシア人の発音するコーヒーが日本流によく似ている事を知つた。昔のペテルブルグ一流のカフェーの菓子はなかなかにぜいたくでうまいものであつた。こんな事からもこの国の社会層の深さが計られるような気がした。自分の出会つた限りのロンドンのコーヒーは多くはまづかつた。大概の場合はABCやライオンの民衆的なる紅茶で我慢するほかは

なかつた。英国人が常識的健全なのは紅茶ばかりのんでそうして原始的なるビフステキを食うせいだと論ずる人もあるが、實際プロイセンあたりのぴりぴりした神経は事によるとうまいコーヒーの産物かもしれない。パリの朝食のコーヒーとあの棍棒こんぼうを輪切りにしたパンは周知の美味である。ギャルソンのステファンが、「ヴォアラ・ムシウ」と言つて小卓にのせて行く朝食は一日じゅうの大なる楽しみであつたことを思い出す。マデレーヌの近く一流のカフェーで飲んだコーヒーのしずくが凝結して茶わんと皿さらとを吸い着けてしまつて、いっしょに持ち上げられたのに驚いた記憶もある。

西洋から歸つてからは、日曜に銀座ぎんざの風月ふうげつへよくコーヒーを飲みに出かけた。当時ほかにコーヒーらしいコーヒーを飲ませてくれる家を知らなかつたのである。店によるとコーヒーだか紅茶だかよほどよく考えてみないとわからない味のものを飲まされ、また時には汁粉しるこの味のするものを飲まされる事もあつた。風月ではドイツ人のピアニストS氏とセリストW氏との不可分な一対がよく同じ時刻に來合せていた。二人もやはりこの一杯のコーヒーの中にベルリンないしライプチヒの夢を味わっているらしく思われた。そのころの給仕人は和服に角帯姿であつたが、震災後向かい側に引越してからそれがタキシードか何かになると同時にどういふものか自分にはここの敷居が高くなつてしまつた、一

方ではまたSとかFとかKとかいうわれわれ向きの喫茶店きつさてんができたので自然にそつちへ足が向いた。

自分はコーヒーに限らずあらゆる食味に対してもいわゆる「通」というものには一つも持ち合わせがない。しかしこれらの店のおのこのコーヒーの味に皆区別があることだけは自然にわかる。クリームの香味にも店によって著しい相違があつて、これがなかなかたいせつな味覚的要素であることもいくらかはわかるようである。コーヒーの出し方はたしかに一つの芸術である。

しかし自分がコーヒーを飲むのは、どうもコーヒーを飲むためにコーヒーを飲むのではないように思われる。宅の台所うちで骨を折つてせいぜいうまく出したコーヒーを、引き散らかした居間の書卓の上で味わうのではどうも何か物足りなくて、コーヒーを飲んだ気になりかねる。やはり人造でもマーブルか、乳色ガラスのテーブルの上に銀器が光つていて、一輪のカーネーションでもおつていて、そうしてビュツフェにも銀とガラスが星空のよううにきらめき、夏なら電扇が頭上にうなり、冬ならストーヴがほのかにほてつていなければ正常のコーヒーの味は出ないものらしい。コーヒーの味はコーヒーによって呼び出される幻想曲の味であつて、それを呼び出すためにはやはり適当な伴奏もしくは前奏が必要で

あるらしい。銀とクリスタルガラスとの閃光せんこうのアルペジオは確かにそういう管弦樂の一部員の役目をつとめるものであろう。

研究している仕事が行き詰まってしまつてどうにもならないような時に、前記の意味でのコーヒーを飲む。コーヒー茶わんの縁がまさにくちびると相触れようとする瞬間にぱつと頭の中に一道の光が流れ込むような気がすると同時に、やすやすと解決の手掛かりを思いつくことがしばしばあるようである。

こういう現象はもしやコーヒー中毒の症状ではないかと思つてみたことがある。しかし中毒であれば、飲まない時の精神機能が著しく減退して、飲んだ時だけようやく正常に復するのであろうが、現在の場合はそのほどのことでないらしい。やはりこの興奮剤の正當な作用でありきき目であるに相違ない。

コーヒーが興奮剤であるとは知つてはいたがほんとうにその意味を体験したことはただ一度ある。病氣のために一年以上全くコーヒーを口にしないでいて、そうしてある秋の日の午後久しぶりで銀座ぎんざへ行つてそのただ一杯を味わつた。そうしてぶらぶら歩いて日比谷ひびやへんまで来るとなんだかそのへんの様子が平時とはちがうような気がした。公園の木立ちも行きかう電車もすべての常住的なものがひどく美しく明るく愉快なもののように思われ、

歩いている人間がみんな頼もしく見え、要するにこの世の中全体がすべて祝福と希望に満ち輝いているように思われた。気がついてみると両方の手のひらにあぶら汗のようなものがいっぱいになじんでいた。なるほどこれは恐ろしい毒薬であると感心もし、また人間というものが実にわずかな薬物によつて勝手に支配されるあわれな存在であるとも思ったことである。

スポーツの好きな人がスポーツを見ているとやはり同様な興奮状態に入るものらしい。宗教に熱中した人がこれと似よつた恍惚状態を経験することもあるのではないか。これが何々術と称する心理的療法などに利用されるのではないかと思われる。

酒やコーヒーのようなものはいわゆる禁欲主義者などの目から見れば真に有害無益の長物かもしれない。しかし、芸術でも哲学でも宗教でも実はこれらの物質とよく似た効果を人間の肉体と精神に及ぼすもののように見える。禁欲主義者自身の中でさえその禁欲主義哲学に陶醉の結果年の若いに自殺したローマの詩人哲学者もあるくらいである。映画や小説の芸術に酔うて盗賊や放火をする少年もあれば、外来哲学思想に酩酊して世を騒がせ生命を捨てるものも少なくない。宗教類似の信仰に夢中になって家族を泣かせるおやじもあれば、あるいは干戈を動かして悔いなき王者もあつたようである。

芸術でも哲学でも宗教でも、それが人間の人間としての顕在的実践的な活動の原動力としてはたらくときにはじめて現実的の意義があり価値があるのではないかと思うが、そういう意味から言えば自分にとつてはマーブルの卓上におかれた一杯のコーヒーは自分のための哲学であり宗教であり芸術であると言つてもいいかもしれない。これによつて自分の本然の仕事がいくぶんでも能率を上げることができれば、少なくとも自身にとつては下手な芸術や半熟の哲学や生ぬるい宗教よりもプラグマティックなものである。ただあまりに安価で外聞の悪い意地のきたない原動力ではないかと言われればそのとおりである。しかしこういうものもあつてもいいかもしれないというまでなのである。

宗教は往々人をめいてい酩酊させ官能と理性を麻痺まひさせる点で酒に似ている。そうして、コーヒーの効果は官能を鋭敏にし洞察どうさつと認識を透明にする点でいくらか哲学に似ているとも考えられる。酒や宗教で人を殺すものは多いがコーヒーや哲学に酔うて犯罪をあえてするものはまれである。前者は信仰的主観的であるが、後者は懷疑的客観的だからかもしれない。

芸術という料理の美味も時に人を酔わす、その酔わせる成分には前記の酒もあり、ニコチン、アトロピン、コカイン、モルフィンいろいろのものがあるようである。この成分に

よつて芸術の分類ができるかもしれない。コカイン芸術やモルフィン文学があまりに多きを悲しむ次第である。

コーヒー漫筆がついついコーヒー哲学序説のようなものになってしまった。これも今しがた飲んだ一杯のコーヒーの酔いの効果であるかもしれない。

(昭和八年二月、経済往来)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

コーヒー哲学序説

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>